

天真正伝香取神道流師範

大竹利典 さん



千葉の貌かほ

写真・文
清野文男

六百年の伝統を後世に伝える

成田市下福田。朝霧の中、シーンと静まり返った60畳の神武館道場。正面に掲げられた、敵一位大神。に向かい二礼、二拍一礼。そして祝詞をあげる大竹利典さんの声が、辺りの静寂を破る。こうして大竹さんの1日が始まり、それは60年間1回も欠かしたことがない。

大竹さんが師範を務める天真正伝香取神道流（以下神道流）は、下総国香取郡（現在の多古町）出身の飯篠長威斎家直（？～1488）を開祖とする総合武術で、その内容は居合術、剣術、棒術、槍術、手裏剣、忍術、築城法、天文、地理、陰陽、気学、針と糸を使った100測量法、神道、仏教等多岐にわたる。同流は昭和35年、日本武道第1号として千葉県無形文化財に指定された。また大竹さんは、文化庁千葉県銃砲刀剣類登録審査員を20年間も務めている。自ら愛蔵する刀は、備前長船政光の名刀。

神道流の極意は、「戦わずして勝つ」という人間修業の剣。すなわち「兵法は平法なり」という教え。人を打って勝つては恨みが残る。兵法の達人とは、道場の勝負ではなく、命のやりとりである」と説く大竹さんの双眸からは、

静かな炎が燃え立つようだ。

神道流には段位はなく、入門して4、5年で目録の巻が伝授される。入門の際には今でも葉指の爪の元を小刀で切つて、右の親指で血を採り名前の下に血判を押す。敬白神文之証を取り交わすほど厳しい。人間として完成されるまで



は極意皆伝を授けてはならないという教えがあつて、いかにその域に達していても42歳までは総伝という位で、今も貫かれています。

近年日本の武道が海外から注目され、大竹さんは昭和51年にハワイ東西センターで、演武と「日本刀と武術について」の講演をしたのがき

っかけで、56年ハワイ、リーワードコミュニティカレッジから招かれ、やはり演武と講演をし大反響を巻き起こした。イギリスBBC放送制作の「劍魂」は、大竹さんの神武館道場で2週間にわたつて撮影。世界各地に弟子を持つ大竹さんの弟子の1人ある故ダイアナ妃の護衛官から、亡くなる直前のダイアナ妃の写真が届いたというエピソードもあり、大竹さんの教えは世界各国に広がっている。

神道流を極めようとした動機はどの問いに、大竹さんは昭和17年、太平洋戦争が勃発した翌年、出征兵士は笑って死ぬべしという話を聞かされ、武道を通して出征兵士の心構えを得ようと、神道流の師範林弥左衛門の門をたたいた。16歳の時であった。

昭和62年、香取神宮で流祖六百年祭が終わり、大竹さんは、「生涯に一番大きいことは終わった。思い残すことはなにもない」という。その古武士さながらの風格、話しぶりは、さわやかなの一語に尽きる。「神道流を絶対に絶やさないでくれと師匠に言われ、遺言と思つています。神道流という武家文化を後世に残すために生涯をかけるつもりです」。悠久の歳月が磨き上げた技芸を今日に伝える日本武道の重鎮大竹さんの、長男・次男・孫たちは、その後継者として修業に励んでいる。号は健之。74歳。